

し の お り べ む こ う づ け
志野織部向付 なごやじょうさんのまるいせき
 名古屋城三の丸遺跡

志野織部向付

この遺物は名古屋城三の丸遺跡から出土した江戸時代初期の陶器です。

制作方法はロクロで成形した後、五角形の型を用いて整形します。鉄釉（てつゆう＝酸化鉄を含んだうわぐすり）で絵を描いた後、長石釉（ちょうせきゆう＝長石を主としたうわぐすり）を施して焼成したものです。長石釉が薄く透明で、鉄絵が鮮やかであることから、連房式登窯（れんぼうしきのぼりがま）で焼かれた「志野織部」と呼ばれる焼き物に分類されます。

向付とは懐石料理などで折敷の飯、汁碗の向こうに置かれる料理などが盛られる器を指します。

生産地

生産地は美濃窯で、岐阜県土岐市泉町久尻に所在する窯ヶ根（かまがね）4号窯からは、ほぼ同じデザイン已向付が出土しています。窯ヶ根4号窯の操業期間は17世紀前半頃と考えられていますが、織部焼などの茶陶が焼かれていたのは1610年代から1620年代頃と推定されています。

美濃窯は室町時代から古瀬戸系施釉陶器を焼いていましたが、桃山時代になり、織田信長や豊臣秀吉らの保護のもと、「志野」、「織部」といった茶陶を生み出し、大きく発展しました。

天正年間（1573～93）に美濃窯で長石釉を用いて、日本初の白い焼き物が開発されました。それが志野焼です。現在、日本で国宝に指定されている茶碗は8点あります。そのうち、5点が曜変天目（ようへんてんもく）をはじめとする中国産天目茶碗、1点が朝鮮王朝の大井戸茶碗、国産は本阿弥光悦作白楽茶碗 銘「不二山」と美濃窯産志野茶碗 銘「卯

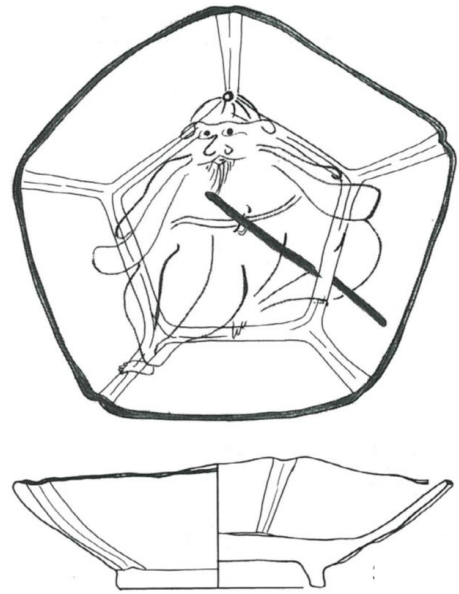


図1 志野織部向付実測図（文献1より）

花牆（うのはながき）」のみです。

千利休の弟子で利休の死後、その後継者となった茶人で大名の古田織部（ふるたおりべ）の指導のもと、17世紀初頭に美濃窯の陶工が織部焼を完成させたとされています。桃山時代は一国一城に匹敵する茶器があったといったような、茶陶がもてはやされた時代です。「志野」・「織部」はその代表的な存在でした。

描かれている人物

この向付の人物は鼻が高く、目が大きくて、口ひげ・あごひげを生やしています。服装はゆったりとしたズボンに、帽子、マントを着け、腰には刀を差しています。桃山時代から江戸初期にかけて描かれた『南蛮屏風』には同じような服装をした人物が描かれています。このような服装は「南蛮服」と呼ば



写真1 志野織部向付



図2 『南蛮屏風』に描かれた南蛮人

れ、戦国時代から江戸初期に日本にやってきた南蛮人（スペイン・ポルトガル人）の格好だとされています。描かれていたのは「南蛮人」だったのでしょか。

織部焼には「織部好み」といわれる古田織部の奇抜で斬新な意匠を表現した器がたくさんあります。特に向付にはその傾向が強いと言われていますが、この向付のデザインもその表れでしょうか。

ところで、絵付師は南蛮人を見て描いたのでしょか？

描かれた「南蛮人」は写実的ではなく、ユーモラスで、のびのびと描かれています。この向付が焼成された頃には、徐々に江戸幕府の対外政策が厳しくなっており、絵付師が身近に南蛮人に会うことは無かったと思われます。かつてどこかで見たことがあったのか、絵などを通じて見たのかは不明ですが、この絵は当時の人々の「南蛮人」に対するイメージをよく表しているものと思われます。

名古屋城三の丸遺跡

このような南蛮人が描かれた陶器は全国的にも珍しく、県内では同じデザインの向付が名古屋城三の丸遺跡で複数見ついている以外はほとんど報告例がありません。窯場でも窯ヶ根4号窯から数点出土しているぐらいで、生産量は極めて少なかったものと思われます。

名古屋城三の丸一帯は現在官庁街となっていますが、江戸時代には尾張藩重臣の屋敷が整然と立ち並ぶ武家屋敷地でした。庁舎の新築や建て替えなどに伴い、これまで20ヶ所以上の地点で発掘調査がおこなわれてきました（図3）。

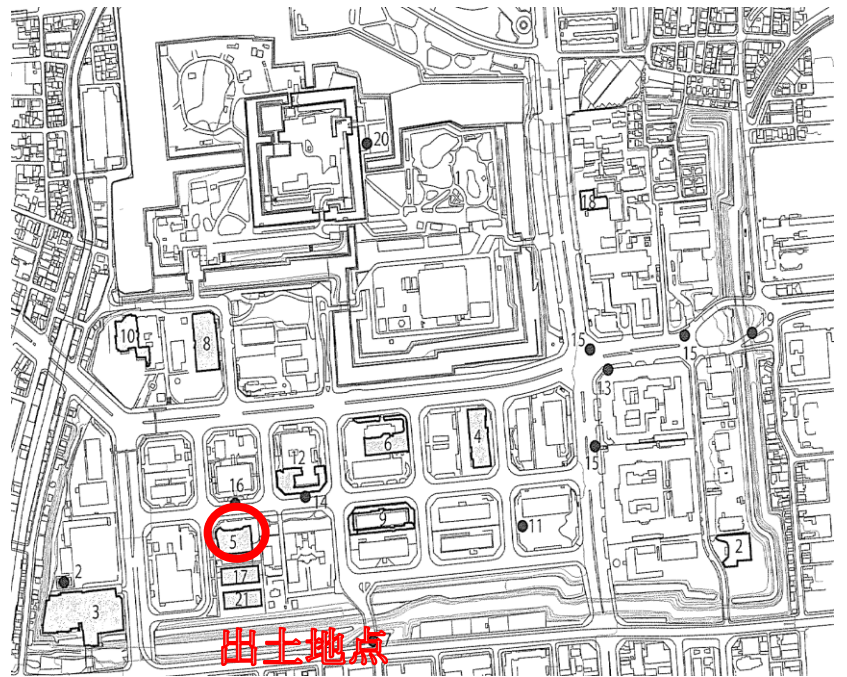


図3 名古屋城三の丸地区遺跡調査区一覧（文献2改変）
枠囲及び黒点の地点で数字がある所が発掘調査地点 南蛮人向付が出土したのは丸印地点（5）の他、4、21である。

この向付が出土した地点（図3の5の地点）は、かつて税務大学校が建っていた場所で、平成2・3年に名古屋家庭・簡易裁判所庁舎建築のために発掘調査されました。この向付は調査で見つかった武家屋敷地内の溝から出土しました。溝の性格はよくわかりませんが、他に椀や皿、すり鉢、灯明具など多数の陶磁器が出土しています。時期的には17世紀初頭から17世紀末までかなりの時期幅があります。

この向付は武家屋敷のなかで、どのように使われ、そして廃棄されたのでしょうか。



写真2 名古屋城と三の丸付近（文献3改変）

参考文献

- 1 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第37集『名古屋城三の丸遺跡Ⅲ』1992年
- 2 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第161集『名古屋城三の丸遺跡Ⅷ』2008年
- 3 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第60集『名古屋城三の丸遺跡Ⅴ』1995年

